2023 年度美術史学会美術館博物館委員会東西合同シンポジウム

学芸員のキャリア・トランジション―その事例と功罪―

実施報告書

2023 年度西支部美術館博物館委員
菅原　真弓（大阪公立大学）

2023 年度の美術史学会美術館博物館委員会東西合同シンポジウム「学芸員のキャリア・トランジション―その事例と功罪―」について、以下の通り報告する。

１、開催概要

・日時：2024 年 2 月 11 日（日・祝）13：00～17：00

・会場：大阪市立大学 140 周年記念講堂（大阪公立大学杉本キャンパス内）

・開催形態：対面およびオンライン同時配信

・プログラム：※敬称略

開会挨拶　　井手　誠之輔（美術史学会西支部代表委員/九州大学）

趣旨説明　　菅原　真弓（美術館博物館委員/大阪公立大学）

基調報告　　渡邊　麻里（美術史学会西支部専門委員/大阪市立大学）

「実例データ　インタビュー結果とアンケート結果をもとに」

基調講演　　栗田　秀法（跡見学園女子大学教授）

「現代の博物館における学芸員」

実例報告１　横山　勝彦（呉市美術館館長）

「博物館から博物館へ」

実例報告２　野田　麻美（神戸大学専任講師）

「博物館から大学へ」

実例報告３　田中　梨枝子（京都芸術大学准教授）

「民間企業から博物館、そして大学へ」

実例報告４　奥村　泰彦（和歌山県立近代美術館副館長）

「博物館」

ディスカッション　栗田、横山、野田、田中、奥村（氏名表記は登壇順）および事務局（菅原、渡邊）

※司会　菅原　真弓

開会挨拶　　井手　誠之輔

・主催：美術史学会、美術史学会美術館博物館委員会

・後援：日本博物館協会、一般社団法人全国美術館会議、日本アートマネジメント学会、文化

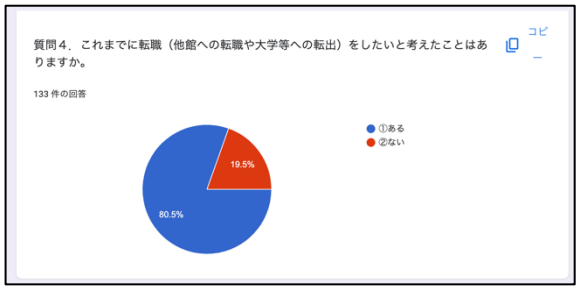
資源学会、アート・ドキュメンテーション学会、日本ミュージアム・マネージメント学会

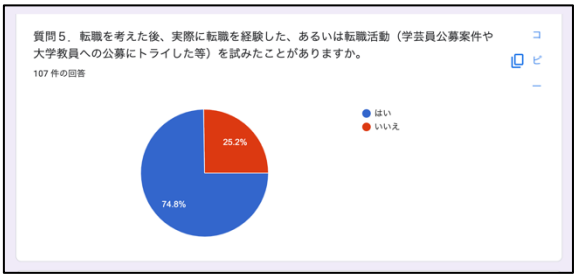
２、報告

・参加者数：対面参加 101 名、オンライン参加 325 名＝計 426 名

・事前アンケートおよびこれを基にした基調報告について：

開催に先立ち、美術史学会の会員か否かを問わず、広く学芸員経験のある方を対象にアンケートを実施した（2/11 時点での回答数は 122、3 月末時点では 133）。質問項目は 9 項目であり、





うち「転職を考えたことがあるか」とその理由（ない場合はその理由）、そして実際に「転職をしたか、転職活動をしたか」とその手段、また学芸員のキャリア転換に関する自由記述(69 件)に現代の学芸員が抱えている問題が見えた[1]。実に 80%を超える人が転職を考え（質問 4）、また実際に転職活動を行なったのが約 75%（質問 5）、さらに転職経験者に「機会があればまた転職を考えるか」を問うた（質問 8）結果は 60%を超える人が「はい」と回答している。学芸員における「転職」がごく身近なことであり、しかし大きな問題をはらんでいることがわかった。

・基調講演　栗田秀法「現代の博物館における学芸員」について

近年の博物館学芸員をめぐる問題について、2023 年に改正された「博物館法」の内容や、2017 年改正文化芸術基本法、2020 年施行文化観光推進法（文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律）など周辺の状況も踏まえつつ、明らかにされた。

今、何が学芸員に求められているのかについて考えさせられる貴重な講演であった。

・実例報告１～４について

まず横山氏の実例報告では、練馬区立美術館から長野県信濃美術館、そして現在の呉市美術館へと移る際、転機になった事柄とその経緯が語られた。また、信濃美術館から呉市美術館への異動の間のキャリアである金沢美術工芸大学での教員経験についても同時に語られた。公立美術館の立ち上げから老舗公立美術館の館長職までを経験した横山氏ならではの、公立館の学芸員論が語られた。

野田氏の報告では、群馬県立近代美術館、静岡県立美術館での勤務の後に 2023 年春から神戸

[1] なおこのアンケート結果の分析を専門委員である渡邊が論文として発表した。渡邊麻里「学芸員のキャリア・トランジション―学芸員の転職に関するアンケート報告」『文化資源学ジャーナル』3 号、大阪公立大学文化資源学会、2024 年 3 月

大学文学部に移る経緯が語られた。氏は民間企業での勤務経験もあるため、そこでの経験などについても語ってくれた。

田中氏の報告は、いわゆる「美術史家」ではない美術系大学出身者が、大卒後に入社した民間企業での勤務の後、どのような転機があって学芸員を目指し、かつこの職に就いたのか、そしてそこからさらに大学教員への転身について語ってくれた。田中氏のような事例は美術史学会会員には珍しいもので、だからこそ貴重な報告であった。

最後の奥村氏の報告は、30 年以上に亘り和歌山県立近代美術館で学芸員として勤務し、現在は副館長という立場になられた氏の、敢えて移らなかった学芸員による学芸員論であった。1994 年の和歌山県立近代美術館移転開館の担当者でもあった氏は、それまで、ともすれば貸し会場のような単なる展示場所になりがちであった美術館というハコに、地域に根ざしたコレクションという命を吹き込み、これを元に活動してきた経験を語ってくれた。

・ディスカッションについて

後半のディスカッションでは、事務局の司会の下、基調講演、実例報告登壇者を併せて 5 名が会場からの質問に答えた。オンライン参加者が多かったため、会場内参加者を対象にした挙手による質問形態ではなく、Google form によって質問を募集したが、これが功を奏して多くの質問を得ることができた。

質問内容は以下の通りである。

――――（事前アンケートの結果から）転職事由として最も多く挙げられていたのは「仕事内容」（＝学芸員としての専門性）であった。これについて、ご自身あるいは周囲の事例から考えることは何か。

――――（事前アンケートの結果から）現職の学芸員が抱える悩みとして多く挙げられたのは「人間関係」であった。これはたとえば、公立館の場合事務職と学芸員との関係がある。また現在は、任期付雇用、非正規雇用の学芸員も多く、その場合の学芸員間での人間関係も大きな問題である。この問題について、必ずしもご自身の例ではなくとも例を挙げ、その解決策について伺いたい。

――――（会場から横山氏へ）報告の中で、自主企画ではない展覧会ばかりを担当していると学芸員としてのスキルが磨かれないという内容があった。若い学芸員に向けて、良い学芸員になるためのアドバイスを頂きたい。

――――（会場から栗田氏へ）国の文化行政が抱える問題点について、現場の学芸員がなすべきことは何か。

――――（会場から野田氏へ）学芸員を目指すためにまずは一般就職をされたとのことであったが、なぜ美術関係の職ではなかったのか。

――――（会場から田中氏へ）美術教育（美術館博物館での教育普及事業）がご専門とのことだが、実際にワークショップなどの教育普及事業を行う中で、同館の学芸員ら周辺との連携は可能だったのか。また、周囲と共に事業を進めるべく心がけたことは何か。

――――（会場から奥村氏へ）もしもこれから、転職するとしたら、どのような職種、あるいは館などが考えられるか。
→この質問に関しては、登壇者全員から回答して頂いた。

――――（会場から）学芸員になってよかったこと、そして後悔していることを教えて欲しい。
→この質問も全員から回答を頂戴した。

　他にも多数質問を頂いたが、全ての質問にご回答いただくこと、ディスカッションしていただくことは叶わなかった。しかし終始なごやかに、かつ活発にディスカッションが行われた。

・閉会挨拶　井手　誠之輔
　基調講演および報告、そしてディスカッションを経て、美術史学会西支部代表・井出誠之輔氏より閉会の挨拶があった。本シンポジウムの内容を受けて美術史学会ができること、大学側ができること、を具体的にご提案され、会を締めくくった。

【付記】事務局では遅ればせながら現在、希望の声が多数寄せられたアーカイブ配信を行うべく、当日撮影した動画の編集作業を行なっている。また、講演、報告内容を文字化した詳細な報告書の編集に向け、作業を実施しているところである（いずれも登壇者の了解済み）。